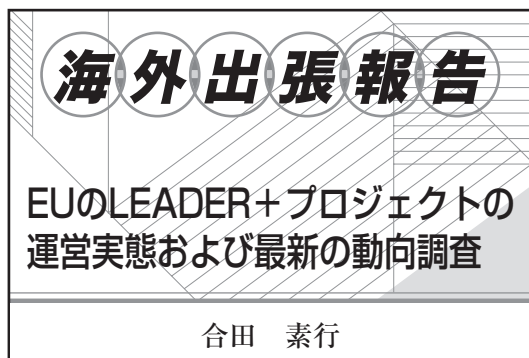




EUの多くの農村地域においても、人口減少や高齢化、経済の停滞に悩まされている。我が国の場合、大都市集中あるいは一極集中がそうした問題の背景にあると思われるが、EU、なかでもドイツのように、比較的分散型の地域発展がなされてきた国においては、どのような対応策が取られており、農村はこれからどのような方向に進んで行こうとしているのか、これが3月18日～25日に行われた調査の目的である。

訪問した地域では、EUの共通農業政策の枠組みで、LEADER+（リーダープラスと呼ばれる地域振興プログラム（2000～2006年））が実施されている。これには先行するプログラムもあり、またドイツにはこれとは別に独自に、やや公共的な組織の関与が強いRegion Activと呼ばれる似たプログラムもあるほか、地域開発の重点の置き所も変わって来ていてややこしいのだが、それらのプログラムは相通ずる方針（キーワードは、連携、まとめ、小規模事業、innovative、協力、ネットワーク）で実施されており、今後はこれらのプログラムが農村地域開発の重要な柱となると言われている。ここでは訪問した地域やそこで出会った人々の印象を簡単に記しておきたい。

メックルング・フォアポメルン州は、東ドイツの北東端、ユンカーたちの農場が展開したプロイセン地域、全体として緩やかな丘陵地域で、あちらこちらに残された林地と100ha単位の畑や牧草地が入り組んでずいぶん走っても次々と同じ風景、多くはないが雪が一面で、それを黒い林が断続的に切断している。車なら丘をさーっと下るとかなり大き

な湖にも出くわして、緑の季節にはさぞや、と思う。観光資源は豊かとみえた。調査目的とはいえ、訪れた時期がいささか悪い。

農産物加工（様々なワイン）やクラフト、職業訓練所をみた後の農家民宿では、Bioland Ranch という看板が西部劇に出てくる倒れそうな木の門に懸かっている、中年の女性が大きな手を振って迎えてくれた。Zempowという村のはずれ、ベルリンから車を飛ばせば2時間半くらいの距離だから、この季節でも5歳くらいの子供をつれた家族が泊まっている。田舎風の2食がついて1部屋50ユーロ（9千円）だが、家族で来ると割安だろう。その家族は森に散歩に出ていた。牧場では馬も飼っている。歯ブラシを忘れたと話していたら、次の朝には、店はまるでみあたらないのに、歯ブラシを買ってきてくれていた。

ニーダーザクセン州はドイツの北西部、ハノーヴァーから車で1時間半ほど走ると中山間地域、Eschwege村に入る。様々な小さな事業（小さな村々の博物館や農産物加工等）を仕切っている女性は、話慣れない英語でゆっくり、丁寧に、まるで私たちが村人で、小さな企画を彼女に持ち込んだ時のようにわかりやすく、その進め方を説明してくれる。経験豊かで実務的ではあるが、そう思わせないゆつたりとしたところがある。

両地域とも確かに人口は減少している。若年層に対する職場不足を痛切に嘆いているが、それは簡単に解消しないことはわが国と同じ。しかし町のなかには、日本の農村と比べるとそれほど悲惨な状況ではないように見えた。高齢化が山の中でも日本ほどは進んでいないようだし、若い人もいることはいる。詳細は数字を追う必要があるが、暮らし方の選択について、ドイツとの違いがあるだろうことは想像できる。経済は地域の基本的姿を定めるが、どのような経済かを決めるのは、そこに住んでいる人たちである。